

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 杉淵 洋一

論 文 題 目
有島武郎の思想とその系譜

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 坪井秀人
委員 名古屋大学 教授 齋藤文俊
委員 名古屋大学 准教授 日比嘉高
委員 名古屋大学 准教授 加藤靖恵
委員 三重大学 教授 尾西康充

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は有島武郎の『或る女』の仏語版刊行にまつわる日仏知識人らの人脈、有島が開催していた〈草の葉会〉、父・有島武との関係を中心として、作家有島武郎の人脈と交流圏について再考を試みるものである。本論文は全15章三部構成より成り、序章と終章が付されている。うち3篇は学術雑誌掲載の審査付き論文である。

第一部「【フランス語版】有島武郎『或る女（前編）』フラマリオン(1926)をめぐる」は6章から成り、第一・二章では1926年にパリで出版されたフランス語版『或る女』*Cette femme-là*の出版経緯を調査し、翻訳者（好富正臣、アルベール・メーボン）とその周辺にいた日仏知識人グループの活動、有島原著との異同や翻訳の精度等について検証を行い、フランスにおける日本関係の書物の出版事情とパリの日本人たちの交友関係、『或る女』仏語訳とベルクソン哲学との影響関係について考察を加えている。第三・四章では二人の翻訳者の活動を探り、『ヨーロッパ』誌等のメディアが日本文学や有島をいかに紹介したかについて調査し、当該仏語訳の受容状況について検証している。第五章では『或る女』における〈音楽〉の表象にベルクソンの〈純粹持続〉概念が反映している可能性を示唆し、第六章では『或る女』をモデル小説ではなく有島自身の経験と思想をより強く反映したテクストとして捉え、そこに西洋文化を日本語テクストに翻訳しようとする作者の意図を見ようとする。

第二部「有島武郎の形成した共同体」は5章から成り、有島が1917年以降、一高、東京帝大の学生たちを対象に自宅で開催したサロン〈草の葉会〉の活動に注目し、そこで創出される知的共同体について考察している。第七・八章では芹沢光治良と谷川徹三を例に、彼らが〈草の葉会〉を通してどのように有島の思想と文学を継承したかを検証している。第九章では鶴見祐輔と有島及び新渡戸稲造との交流に焦点をあて、鶴見が主宰した〈火曜会（ウイルソン倶楽部）〉と〈草の葉会〉とを比較考察している。第十章では有島の小説「クラゝの出家」を取り上げ、舞台であるアッシジの描写に有島の軽井沢での体験の投影があるとする。第十一章では社会運動家石川三四郎がヨーロッパにおいてルクリュ家やエドワード・カーペンターら無政府主義者たちとの交流から受けた影響について分析している。

第三部「思想伝達についての系譜—父から子へ—」では、有島武郎とその周辺人物たちにおける父から子への思想の継承、あるいはその拒絶、不可能性について論究されている。第十二・十三章では原敬首相暗殺事件への反応を仲立ちとする有島の父・武に対する意識、あるいは出身校である学習院の教育に対する屈折した意識が、彼の教育観・家族観を検討しながら考察されている。第十四・十五章では鶴見祐輔・俊輔の父子関係を取り上げ、自由主義の世代間での伝承と、新渡戸稲造の自由主義思想がその伝承の過程で屈折していくさまが検証されている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

大正期文学を代表する有島武郎は、作品研究はもとより、その思想や受容に関わる研究も活発に行われるなど研究史の蓄積において恵まれた作家だが、その位置づけは文壇史的な狭い枠組みの中に限られてきた。文学・芸術はもとより思想や文化運動、政治など幅広い領域を包括する知的な交友圏を確立し、陰に陽に彼らに影響を与えた有島の思想の系譜は十分に描かれてきたとは言えない。本論文は作品の翻訳や紹介、文学サロン等を通して有島に憧憬を抱いていた学生たちや政治家、ジャーナリスト、フランスのジャポニザン（日本愛好家）など、相互に交通する集団的な視点から有島の思想の再評価を図った研究として、その意義を評価すること出来る。有島武郎を中心に張りめぐらされた人脈の縦系横系が大正期から戦後にまで至る近代日本の知識人論的な^{コンステレーション}「星座」を編み上げていく過程を描き出そうとした意欲的研究である。

本論文の最も重要な功績は原作者没後3年にあたる1926年にフラマリオン社から刊行された有島の『或る女』前編のフランス語翻訳の成立の経緯を日仏の知識人や外交官僚らの人的なネットワークの解明を通して検証したところにあるだろう。その検証は単に日本文学作品の外国語翻訳の事実を確認する作業にとどまらず、この翻訳テキストを媒介に有島を中心に形成された交流圏の星座を浮かび上がらせることを企図している点において異なる言語と思想・人間の関係に基礎づけられた一個の文化史を構築し得ている。とりわけ好富正臣、アルベール・メーボンという翻訳者の足跡を丹念に調査し、加えて芹澤光治良や新渡戸稲造あるいは松尾邦之助といった関連する人々がどのようにそこに関わり得たのかを考察して、論者の言う翻訳における〈共同＝協働〉性を明らかにしていく手際は見事である。それは仮説的な段階ではあるものの、ジャポニズムやオリエンタリズムあるいはベルクソン哲学の影響が一方通行的な次元にとどまらなかったのではないかという興味深い指摘にも繋がっている。

加えて、有島の〈草の葉会〉や鶴見祐輔が主宰した〈火曜会〉といったサロン、あるいは軽井沢における夏期大学などの知的交流の場が有島武郎の思想の伝承において重要な役割を果たしたことを多様な人物の言説を緻密に再編成することによって検証しており、情報量の豊富な注釈部分とあわせて、本論文が実証的に初めて明らかにした人間関係史の知見は少なしとしない。

とはいえ、ベルクソンへの有島の思想の逆投影その他の可能性を大胆な仮説として提示するものの十分な裏付けが行われていない点、論及が人脈論の範疇にとどまって有島武郎の作品のテキスト分析との関連づけや翻訳の細部の検証が不足している点、また論述に不要な重複が見られる点など、本論文が幾つかの欠点を抱えていることは否めない。とはいえそれらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。